

パソコン考

降って湧いたという話だ

昨日まで軽やかに文字を刻み

計算をし検索をしてくれていた

パソコンソフトが

朝一番のお決まりの作業で

立ち上がらない

横文字のなにかのメッセージが

やたら出ているが

なにが問題なのか

なにが不満なのか

仕事の必要上

どうしても動いてもらわねば

ならないものだから

急遽アンインストールと

インストールの繰り返し

こちらが焦っているとみると

相手もここぞとばかりに

ストライキを決め込むつもりらしく

IT専門用語らしいメッセージを

立て続けに発し

睨み付けてくる

仕事の必要上

どうしても動いてもらわねば

困るのだ

ほんの昨日までの

あの機嫌のよさはなんだったのか

OFFにするときだって

なんなのか

ひらひら手の平をふり

じゃあまたねという合図を

見せてくれたのではなかったか

それとも

日頃から隙をみて

ノーサンキューという

合図を送っていたのかもしれない

馴れ合ってしまった

相手の表情を読み取ることさえ

怠っていたと

いうことなのだろうか

パソコンという

このちよつと気難しい淑女は

あなたの顔を見るのも大嫌い

というセリフを

ときおり激しい剣幕でもって

迫りたがるのだ

泣いてどうなる

このようなときに泣くなど

見苦しいではないか

何度も忠告がなされて

きたではないか

その意味を解せず

ひとりよがり動き

いきなり首になったなどと

わめくではない

その兆候は幾度もあった

相手の出方を非難し

受け身にばかり動いていては

来るべきものがやってくる

恨むなどという

ますます己の度量を引き下げる

ことではお粗末だ

恨みが恨みを呼ぶという

お決まりの

連鎖の中に閉じこめられて

しまうだけでしかない

相手のことを許せ

相手の非があれば許せ

相手の横暴を許せ

その前にお前が

相手に感謝しろ

お前を根底から変える

大きなチャンスを与えてくれた

少々痛い

なんなのか

これはラッキーだ

前を見る

しつかり前を見る

目を背けることなく前を見る

大きなチャンスなのだ

千載一遇のチャンスなのだ

主張などなく

いきなりフラッシュでも
焚かれたという
思い出し方だ

主張を貫き
激しく言い募って
意固地になったときの
ことを

なんであんなにこだわり
激しく詰め寄り
詰め寄せられたりしたのか
いったい
あれはなんだったのか

今となっては

忘れてしまい

細かくは思い出せもしない
というほどのことに
なんで

身も世もないほどに
うろたえ
こだわったのか

それらの殆どは
主張なんてものの
体をなしていない

行きがかり上
感情だけが走り
激昂の余り目の前の階段を
脈絡もなく駆け上った

というだけのことなのだ

主張なんでもものではない

そんなしやれた

ものではない

しかし

今もまだ続けている

真つ直ぐに歩めば

よいところを

真つ直ぐに歩まねば

ならぬところを

余所の方向に

いたずらに目を移し

落ちつきなく

手綱を引きちぎり

激しく吠えたとて

駆け出してゆく

意気地のない犬に

なりきつて

しまおうとしている

応援歌

新入社員のみんな

この世界大不況の中

めでたく入社的身とはなったものの

理不尽な扱いに

悩んではいないだろうか

内定取り消しという

道の替わりに

新入社員とはなったものの

即戦力とならねばならない

即断即決をせよ

仕事の覚えが遅い

ケアレスミスが多い

到底将来の見込みがない

などという口説で

巧みに片隅に追いやられ

試用期間なのだから

後一月の間に

かくかくしかじかの

ノルマが達成できねば

どういうことになるのか

わかっているだろうね

と詰め寄られたり

念書にサインをさせられたりする

どんなに懸命に働いても

どんなに右往左往しても

誰に助けを求めても

職場が職場でなく

死刑という判決が先にありきの

首狩り場にはなつてはいないだろうか

なんだかそんな気がする
のは気のせいだろうか

もつとも

確たる話ではないので

杞憂であればいいのだが

追い出すつもりか

新入社員雇用という

作戦があるやにも聞く

全くの杞憂であれば

いいのだが

いまどき

ぶっそうなことばかりが

平気でまかり通る

万が一そんなことで

あつたりしたら

新入社員の諸君

君の評価を

空に委ねたまえ

君自身で

鬱々と抱え込むことだけは

必要ないことだ

卑怯な作戦のもとに

一人や二人の人間が

君の人格について

とやかく言おうとも

その卑劣な悲しい相手の

ことを憐れみ

全てのことを

空に委ねたまえ

五月と雨

五月の雨もいいものです

礫となつて落ちてきたかと思うと
からりと日の光が覗いたりします

霏つたり霞んだり

肌にやんわりと

まとわりついてきたりします

それが

決して鬱陶しくない程度で

移りゆきます

雨もよし

風もよし

日の光もよし

川では小さな魚や

巨大な金鯉や

亀や家鴨がはしゃいでいます

五月の雨もいいものです

川べりを

雨礫に打たれながら

人々が声をあげ駆けていきます

どうにでもなれ

こだわりを捨て、いつそ投げ出してしまおうと
叶うこともある

叶うことのために、投げ出してしまおう
というわけではないが
どうにも、こうにもならないときは
どうにでもなれだ

小さなプライドや、建前を放り捨ててしまおうと
なにを恐れるでもないことが、よくある

開き直るつもりではないが
小さな籠の扉を開け、空にでも、地にでも
どこにでも行ってみるだ

一巡りして元の巣に戻ろうと、戻るまいと

それはそれ

どうにでもなれ、と口ずさみつつ
至極丁寧な仕事をやらかしたり
素晴らしい花を活けたりすることが
よくあるではないか

眼鏡

眼鏡をかけ始めて三年になる
百円眼鏡から始めて
せいぜい五千円のやつを
十本はもっている

眼鏡など不要だ
と最近まで本気で思っていた
パソコンにかじりついても
四時間近いナイターを
毎日観ても

新聞も読めるし
山の頂上の測候所の屋根色まで
くつきりと見えていた

ところが

自分の書いた字が読めない
手元の文字が霞んでしまう

会議中

記録を朗読しながら
何度目をこすったか

それでも外に出れば
百メートル先の看板がはつきり
読み取れる

老眼という響きが
とにかく好きになれなかった
仕方なく手にしたものの
眼鏡というものは

ただかければよいというのではない
と始めて知った

鼻当てがずれる

レンズが目の前にうまく収まらない
耳にうまくかからない

どのフレームも

狐目型に反っている

そうなるよ

鼻当ての調整にペンチを用い

角度の調整に接着剤を流し

力まかせにフレームを曲げる

調整をする度に

かけたりはずしたり

手が滑って

レンズをヤスリで削ってしまったり

伸ばしたり縮めたりしているうち

鼻当てがポキリと

折れてしまったりする

そんなこんなで

意地の張り合いになり

いつの間にか

十数本にもなってしまった

結局目の前の字を読むとき

かける一つがあればいいのだから

十本をどう使うのか

このことが

今の大きな問題になっている

パソコンは

パソコンはやはり難しい

どこが難しいのかをお互いが

わからずに進めてしまうという仕儀で

これがなんとも始末に悪い

これをこう頼んだつもりが

あれをあんなふうに頼まれたつもりが

それぞれがてんでに違う道を

平気で歩いている

その食い違いが生じても

まるで説明に窮する

説明する本人のことばが相手には

相手の良識をもってしても

通じない

のかもしれない

どんなに言葉を尽くしても

どんなに具体的に話したつもりでも

なにかが足りない

なにかが妙だ

なにかが食い違ってしまう

例えて言えば

一つの山を見上げ

一方は英語で

一方は日本語で

顔を見合わせ互いに笑顔で

話し合っているというものだ

ということとは

原初の人々は

つまりパソコン用語を話すごとくに

なんなのか

ちぐはぐなことをやりながら

ちぐはぐな方向に

向かって歩きながら

言葉を作っていったのだろうか

夥しい年月を重ね

夥しい生き変わりを重ねながら

五月の朝

朝まだきに目が醒めます

三時とか四時

新聞配達バイクもまだです

この時期

東に開いた小窓に

昇りは始める前の朝日の礫が

強烈なブラズマとなり

光をピンポイントに絞って

狙い定め

投げ入れてきます

何年前のことか

この家に越してきた五月の朝

あまりにも赤々とした

熱い光がどっと射してきたので

カーテンを開け放したまま

眠ったのかもしれないと

飛び起きました

日の当たる家

日の出の勢いの光のシャワー

を浴びる部屋

形容はいかようにでも

できませんが

カーテンを貫いてくる

獰猛なまでの

光のエネルギーの

凄まじさのことを

説明するのは難しいものです

例えていえば

光を受けた部屋は

真昼の部屋より数十倍も明るく

熱く燃え、強く輝き

それこそ眠気など

根刮ぎ剥ぎ取られてしまいます

遮光カーテンに替えてさえ

獰猛なシャワーの力は

まるで衰えません

一度覚えてしまった体は

もう日の出前には

すっかり起き出します

起きて朝の息吹を

聞くときもあります

寝不足にふらついて過ごす

こともあります

五月の朝は

今年もきつかりの時期に

やってきました

嬉しいことです

寝る前からワクワクして

朝まだきには目が醒めます

三時とか四時です

新聞配達のパイクも

とてもまだやってきません

飛行機

好きな飛行機に
乗れない期間が続いた

二十年前
久住山上空での乱気流に
乗客みんなが叫び
躍った

別府から福岡までの
わずかな距離の
わずかな時間の筈が
永遠とも思える拷問となった

予兆はあった
職場旅行に
飛行機でもあるまいに

墜ちたら職場は全滅だよ
と笑い合った

出発が一時間も遅れた
シートベルト着用のサインが
いつまでも消えなかった

数十メートルも
一気に落ちたかと思うと
次の瞬間には
その二倍もふうつと上る
という有様で
久住の山並みを下にして
視界にはなにもない
なにも見えない

まるで紙飛行機が

風のままに流れていくかに

飛行機はあてどなく

ごたごた

ふらふら揺れ流れた

その度にみんなは

薄い板底の真下の

荒れ狂う空気を力の限り

足で踏みしめ

力いっぱい突っ張り

両手を組み

わななき震えた

叫ぶとか

泣くとかの気色はなく

呻いたり

げいげい吐いたり

冷や汗だらけになり

足で踏みつけ

力いっぱい突っ張り

両手を組み

肩を丸め震えるばかり

とにかくシートベルトの

着用サインが消えることなく

ようやく

別府から福岡まで

流れ流れて

なんとか辿り着いた

ところが

辿り着いた筈の飛行機が

空港上空を回る

福岡空港の上空を

ごたごたぐるぐる

果てもなく旋回した

着陸許可が下りないという
実際は三十分かそこらの時間
だったのだろう

飛行機が着地したとき
歓声も拍手も
あがらなかつた

顔色は真っ青だった
みんなの顔も土気色で
シートベルトを外し
よろけながら立つた

もう
嬉しいとか
安堵したとかいう
表情を出そうとすることさえ
忘れていた

花の絨毯

遊歩道に花弁が散り敷き
一夜の雨に濡れそぼる

浅い川原に花弁が散り敷き
川面はさくらの色に染まる

校門に花弁が散り敷き
休日の門が花の香に埋もれる

廃屋の屋根に花弁が散り敷き
折りからの風に舞い上がる

南の風に花弁が散り敷き
恋人たちをやがて眠らせる

歌いたければ

歌いたければ歌うがよい
グループがなんであれ
チームがなんであれ

ハーモニーが必要であるのなら
グループもチームも選別すべきだが

本当に歌いたければ
野原でも川原でも歌うがよい

ましてや今

〈シンガーソングライター募集中〉

であるのなら

まず歌ってみることだ

もちろん

歌いたければの話だが

もちろんどんな舞台で

どんなかたちで歌うのかを

知る必要はあるうが

しかし

まず歌ってみなければ

話にならない

本当に歌いたければ

野原でも川原でも歌うがよい

ただ今

〈シンガーソングライター募集中〉

宴だ

十五パーセントにも満たない支持を得て
新たな誌誕生なる

最盛期の二十五パーセントにも満たない数で
新たな誌誕生なる

しかし、これらは頭数だけのこと

中身はといえば

百パーセントを超えているのかもしれない

いや、ゆうに二百パーセントを超え

芳醇な美酒を湛えた

湖であるのかもしれないのだ

今、新たな誌の誕生の前に

実に美しい

実に色鮮やかな

甘露ともいうべき酒で満たされた杯を

恭しく

高く、たかく捧げる

メジロ

ガラス戸の向こう

一メートルほどのところに

いつもメジロがやってきます

侘助の白や

山茶花の赤の

花弁を目当てに来ている

ようです

メジロは緑色の羽を

せわしなく自在に震わせ

紫色の嘴で花の芯をつつき

枝から枝へ

素早く動きます

きよとんとした顔が

愛嬌いっぱい

一瞬なにかを考える仕草になり

すぐに結論を出します

目玉を賢しげに

前後左右に動かし

なあお前もそう思うだろう

というふうに問いかけてきます

一羽が去ると

すぐに二羽目がやってきます

侘助の白や

山茶花の赤の花弁は

「今度はこっちだ」

「こっちの方が汁が甘いよ」

「サンキュウ、またね」

「きつと、また来てね」

なんなのか

とでも言い合っているみたいで

メジロはそのたびに

親しげなウインクを

パチンパチンと何度もします

侘助も山茶花も

朝日の中ピンと鮮やかに輝り

とても誇らしげです

合格

合格という知らせ
おめでとう

いよいよ高校生だ
いよいよ巣立ちのときだ

キャンパスに
いろいろな色を塗るんだ
いろいろな色をね

いろいろな風の匂いを
嗅ぐんだ
暖かい風や
冷たい風もあるけど

いろんなことが待っている
いろんなことがね

贈りたいことばがある
どんなときでも

歌を忘れないでね
どんなときでも

楽しい歌を忘れないでね
いろんなことが待っている
きつといろんなことがね

夢一夜

ふいに夢一夜という歌の一節が
浮かんできた

この頃なんの予告もなく
メロディだけが浮かんでくる
はてなんという歌だったか
ということになる

オカリナを始めて三月
運指を間違えれば
頭の中のメロディは砕け散る
オカリナは侮れない楽器だ

それではとハーモニカにも手を出した
こちらは全くの自己流だ
目を閉じ音を探し探し

メロディを吹き当てる

オカリナもハーモニカも
中途半端だけれど
これらのお陰なのだろうか
なんの予告もなく
メロディがひよいと浮かび上がる

夢一夜は悲しいメロディだけれど
高音のサビのところがいい
〈ああ夢一夜一夜限りに〉
たとえ哀しいメロディであっても
体がメロディを奏するということは
理屈抜きに嬉しい
体がほかほか弾んでくる
なんともなく無性に楽しい

ハーモニカが吹けない

オカリナに手を焼きながら

二ヶ月にして

なんとなくきつかけがつかめてきた
ファミレドシラソファミレドシラの
最後のシラがうまくいかないけれど

簡単な楽譜なら

あまりまごつかずに

済むほどになってきた

ところがハーモニカが吹けない

子供の頃

一度聞いたメロディは

たちどころに吹けた

のだったと記憶している

なにせ

理屈で考えるようになってから

音が拾えなくなった

自由に描いていた筈の絵も

屋根は黒か赤か緑だとか

柱は真っ直ぐだとか

そんなことを

考え出すと絵も描けなくなった

文章もそうだ

理屈がついてくると

光るものも光らない

もともと光る筈もないと

いわれればそれまでのことだが

しかしやはり

理屈で文章を刻み過ぎると

バネが弾けて

中身が

どこかに飛んでいってしまふ

そうしてみると

オカリナは理屈で吹いている

音を自然に拾うなどという

さまにはとてもなっていない

二ヶ月ぐらいのことで

喜んでいと

屁理屈屋で終わってしまふそうだ

音を拾うには

音の中に住み

音で呼吸をするほどにならないと

やはりいけないのだろう

ハーモニカが吹けない理由を

懸命に頭をひねり
理屈で考えている